

副詞による取り立ての焦点を探る

小林 典子

0. はじめに

文の「焦点」は、これまで質問文や否定文などにおいて問題にされてきている。質問文全体のどの部分が質問の焦点なのか、否定文ではどの部分に焦点をおいて否定しているのかというようなことが情報構造の視点から論じられてきている（久野1983等）。「焦点」という用語は「旧情報」に対する「新情報」、「予測性」に対する「意外性」、などの対立で捉えられ、文の中で相対的に最も重要な情報を担っている部分と定義されるのが一般的であろう。本稿でいう「焦点」も、これとは矛盾しないが、ここでは「受け手（読み手／聞き手）」の注意を最も強く引き付ける文要素（要素が複数個もありうる）」という意味で「焦点」という用語を使っていくことを断っておく。

一方、統語論では、「取り立て」（おもに取り立て助詞、ハ、モ、コソ、サエ、シカ、等）に関する論議が盛んである（寺村1984, 1991等）。「取り立て」という用語は「対比的な取り立て」という意味で使われている。取り立て助詞の前に隣接している文要素は、それが名詞であれ、名詞句であれ、動詞であれ、何か他のものと暗に対比されて取り立てられる。

小林（1987）では、〈最初に〉〈特に〉〈おもに〉など、筆者が序列副詞と呼んだ一群の副詞が、文の「焦点」を「取り立てる」機能のあることを論じた（註1）。

① 最初に太郎は一郎のボールを蹴った。

例文①では〈最初に〉は構文上は、〈一郎のボールを蹴った〉を連用修飾しているが、意味上では〈一郎の〉に結び付いていると見なす読みが一番自然だろう。この場合、〈最初に〉は〈一郎の〉に焦点をおいて、ここを取り立てているというわけである。（文脈によって、他の読みが、可能になることはもちろんである。）

本稿は、この序列副詞がどのようなものを取り立てる傾向があるのかを探ろうというものである。〈最初に〉〈特に〉〈おもに〉の3語を取りあげ、予備テスト、本テスト、追加テストと3回にわたり実施して得られたデータから、取り立ての焦点が置かれるものにはどのような特徴があるのか調べ、取り立ての焦点が受け手によって決定される場合の条件を考えてみる。認識的側面から取り立ての仕組みをさぐり、これを統語的な特徴で記述しようという試みである。

1. コト内のある一部分を焦点としてこれを取り立てる副詞

取り立ての副詞の存在については工藤（1977, 1982）が筆者の論考に先だっているが、これは渡辺（1957）の「誘導」の概念の流れにあるものであり、取り立て副詞（限定副詞—工藤（1977）ではこう呼んでいる）がどのような意味内容のものを誘導するのか、といった意味機能の側面からの整理であった。文中のどの部分が、どのような仕組みで、取り立てられるのか、は論点にはなっていないかった。

小林（1987）で、序列副詞を別グループとして問題にした理由は、これによる取り立ての焦点が、文脈に依存して、文全体から判断して、決定されている、という点にあった。文副詞、あるいは陳述副詞といわれる副詞群と同じように、コト（叙述内容）の外側からコトを判断しているものである。ただし、序列副詞は文副詞、陳述副詞と異なり、コトの内容の情報量の増減に関与するといった点では、情態副詞のような性質もあわせ持っている。なお、北原（1991）は〈珍しく〉のような注釈修飾の副詞を、「叙述内容に対して外側から注釈するもの」として取り上げ、その修飾の対象となる「修飾のスコープ」と、そのスコープの中で「実際に修飾されていると解釈される部分」とみなせる「修飾の焦点」について論じている（「」内は北原より）。これは、コトの外から焦点の部分について注釈している点で、序列副詞の修飾の構造と、よく似ていると考える。

2. 取り立ての焦点をさぐるテスト

2.1. 作用域 (scope) と焦点 (focus)

考案したテストの一つは、次のAのようなもので、(1)に続けて「次に」で始ま

る(2)の文を完成させるといふもので、被験者には下線部分に自由に文を続けるように指示した。

- A (1) 最初に太郎は一郎のボールを蹴った。
 (2) 次に_____。

(2)に続く文としては、例えば

- a. 次に太郎は次郎のボールを蹴った。
 b. 次に太郎は一郎の手を握った。
 c. 次に太郎は走りだした。

などが考えられる。aのような後続文を考えたということは、(1)において〈最初に〉は〈一郎の〉の部分に焦点をおいて、これを取り立てた読みをしたと考えてよいだろう。そのために(2)では〈一郎〉以外の他の人〈次郎〉を頭に描いたわけである。同じように、もでは後続文(2)が〈手を握った〉となっていることから、(1)においては〈ボールを蹴った〉が取り立てられていると判断できる。cの場合は、述部全部が新しい情報であることから、(1)においては、述部全体が取り立ての対象であったと解釈できる。

A(1)における〈最初に〉の作用域(注²)は、普通の読みでは、述部全体、つまり〈一郎のボールを蹴った〉であるが(注³)、その中で取り立てられる焦点は〈一郎の〉であったり、〈ボールを〉であったり、〈一郎のボールを〉であったり、場合によっては、作用域全体を焦点とすることもあつたわけである(注⁴)。

調査した結果では〈最初に〉による焦点は狭いようで、一つの補語に集中する傾向が見られた。ちなみに、同じ叙述内容で、〈まず〉と〈それから〉を使ってBのようなテストをしてみたら、こちらの方が焦点が広いようであつた。

- B (1) まず、太郎は一郎のボールを蹴った。
 (2) それから_____。

以下にA、B各々のテストにおける焦点部分とその人数を示す。

Aの場合：12人中 8人……一郎の

- 1人……ボールを蹴った
- 1人……太郎は蹴った
- 1人……太郎は一郎の
- 1人……蹴った

*A Bタイプの比較

- テストは予備テストとしておこなった。
- 人数も12人、15人と少ない。

Bの場合：15人中 9人……一郎のボールを蹴った

- 3人……一郎の
- 2人……蹴った
- 1人……太郎は一郎のボールを蹴った

A, Bそれぞれのタイプで同じ叙述内容のもの、17問をテストした結果、述部全体、及び主語を含む文全体を取り立てるのはBタイプに多かった。但し、Aタイプでも動詞+補語の結合したものがセットで行為の過程を示すような場合（〈スイッチを入れた〉〈型紙を作った〉）は、述部全体が取り立てられていた。しかし、これ以外では、Aタイプのテストでは文要素^(注1)一つを選ぶ傾向が強く、Aタイプのテストは取り立ての焦点をさぐるのに有効だと考えた。

もう一つのテストは〈特に〉〈おもに〉に関するもので、「どこを強調して読みましたか。番号を〔 〕に記入してください」という質問をCのような文に対して問い、一つだけ文中の要素を選ばせるという方法をとった。

C おもに花子は大学で英文学を勉強した。〔 〕

- (1) (2) (3) (4)

これは、文レベルの音声上の強勢は意味的な取り立てと一致する、という考え方 (Bolinger 1972, Akmajian 1979等) に基づくものである。

ほかに「なぜ最初に……しましたか。」というようなテストも実施したが、このテストからの焦点に関する分析は単純ではなく、今回は集計していない。

2.2. テスト実施方法

テストでは互いに似た構文や内容（語の意味、語順など）を少しずつ条件を変えると、どのように取り立ての焦点が変化するかを調べた。条件の異なる似通った文をいくつも被験者に読ませることは、設問どうしで互いに影響を与え合うことになるので、この方法は避けなければならない。そこで例文は9つ

のテストに分散し、似通った文は、別々のグループの被験者に対して実施した。

被験者総数：男女大学生（日本人）194人

例文総数：76文

テストの種類：9種類

問題数／1テスト：11文～17文

人数／1テスト：21人～35人

2.3. 集計方法

2.3.1. Aタイプの場合

それぞれの要素別にこれを選んだ人数を集計していったが、自由に文を書かせたために、取り立てた要素が2つ以上であったり、1文全部という場合もある。2つ以上の場合にはどのような組み合わせで選んでいるかも集計してあるが、本稿では単純に、これら2つ以上の要素の取り立ても、それぞれ別々に加算して焦点の傾向を見ることにした。例えば、3.2.の図1で取り上げた①の場合（予備テスト12人分に本テスト25人分を加え、37人分のデータ）を見てみよう。実際の取り立て方とその人数は次の通りであった。

～郎の……15（人）

ボールを……1

太郎は・一郎の……7

一郎の・蹴った……1

ボールを・蹴った……6

太郎は・蹴った……1

太郎は・一郎の・ボールを・けた……5

これをそれぞれの要素で以下のように集計整理した。

① 最初に	太郎は	一郎の	ボールを	蹴った。
人数(%)	13(35)	28(79)	12(32)	13(35)

このような集計整理は、実際の取り立てを正確には記述し得ないが、焦点の傾向を大体において把握できると考える。

2.3.2. Cタイプの場合

Cタイプの場合の一つだけを強制的に選ばせているので、それを選んだ人の割合を単純に出している。

3. テストに示された傾向

3.1. 取り立ての焦点の仮説

テスト結果から、序列副詞による取り立てには以下（小林1987より引用）に示すような法則があるのではないかと考える。

仮説1. <～が>格は第一優先順位で取り立てられる。

<～は>で提示された格は<特に><中でも>のような対比的な意味の場合だけ取り立てられる。つまり主題化の<～は>は取り立ての対象にはならない。

仮説2. 意味をより具体的、個別的に限定するものが取り立てられる。つまり、

a. 一つの名詞句が枝分かれしている場合は、その枝の終端の要素の中で、最も意味の範囲を限定する力のあるものが取り立てられる。

b. 語の意味の階層レベルが、より下位のものが取り立てられる。

仮説3. 序列副詞が文頭にではなく、文中に入った場合は、これの後ろに隣接する要素が取り立てられやすくなる。

仮説4. 文頭に近い要素よりも文末の述語動詞の直前に隣接する要素のほうが取り立てられる。

3.2. 仮説1について：<～が>と<～は>

仮説1は「<～が>格が第1優先順位で取り立てられる。」というものである。これは単文の場合に言えることであって、複文（埋め込まれた文も含む）の場合にはその限りでないことを断っておく。<～が>（主格）を含んだ全ての文で、第1位で取り立てられた。一方、<～は>の方は取り立ての対象にならず、この場合は述部の中の要素が取り立てられる。但し、<特に>のような対比的な副詞は、これを取り立てることができる。この仮説を次に示す図1, 2, 3で見よう。

図1 (37人)

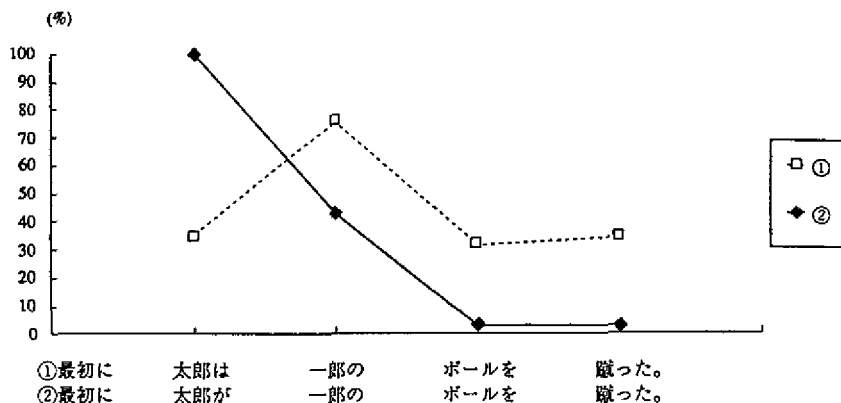


図2 (37人)

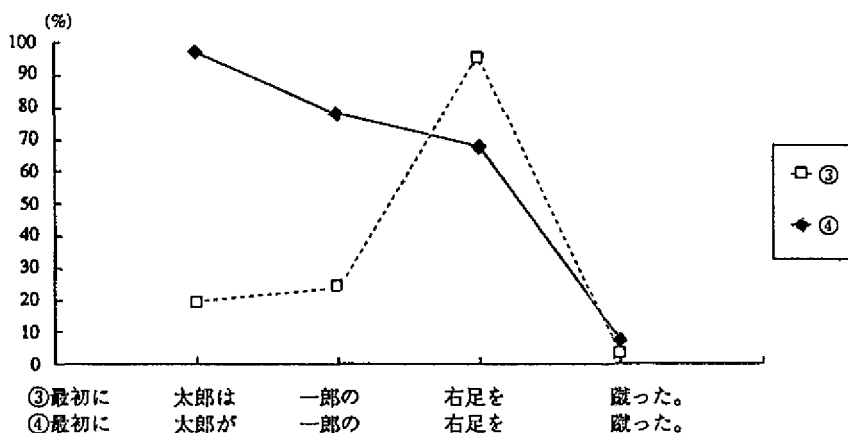
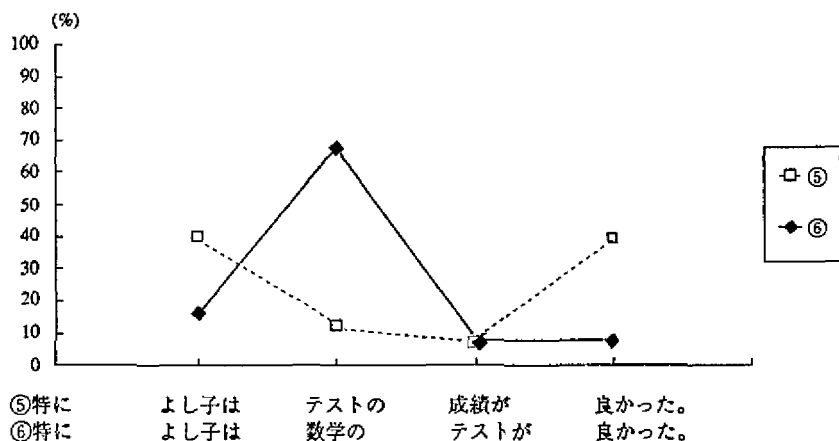


図1及び図2の例文②④で、〈太郎が〉が取り立てられていることが明白である。〈太郎は〉は文全体を取り立てるような読みの場合だけに〈～は〉が含まれて取り立てられている。図3では、⑤の〈よし子は〉が単独で40%の人によって取り立てられている。タイプA「最初に一次に」のテストでは、〈～は〉はほとんど取り立てられていない。特に、単独では取り立てられていない。⑥では、〈よし子は〉は16%に落ちているが、これは〈数学の〉の方にもっと注意が引き付けられたためであろう。このことについては、次の節で検討しよう。

図3 (25人)



3.3. 仮説2：意味の具体性、個別性

3.3.1. 仮説2 a <名詞の名詞>の場合

仮説2 a. 「一つの名詞句が枝分かれしている場合は、その枝の終端の要素の中で最も意味の範囲を限定する力のあるものが取り立てられる。」を検証してみよう。

これは、例えば下の図のような構造の文があった場合、名詞1か名詞2のうちから、相対的に意味の限定力のあるほうが、焦点に選ばれやすい、ということである。

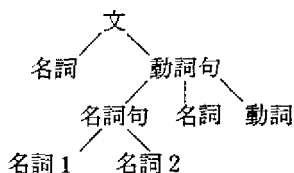
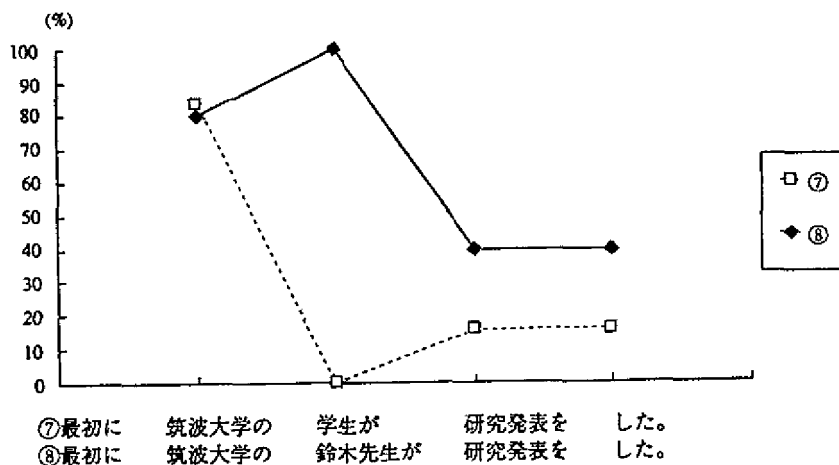


図1<一郎のボールを>と図2の<一郎の右足を>、を①と③、②と④で、比較してみよう。図1①②では<一郎の>に取り立ての傾向が出たが、図2③では<一郎の>よりも<右足の>の方が取り立てられた。<一郎のボール>では、<固有名詞の一般名詞>という構造の中で、固有名詞の方が選ばれたが、

③<一郎の右足>では<全体の部分>という捉え方をしたのか、部分<右足>の方が選ばれている。動詞は<蹴った>であるから、蹴る対象としての一郎の身体部分へ、読みの焦点が集まったとみられる。④になると、動詞<蹴った>の動作主が<太郎>以外にもいることが含意されており、そのために他の動作主の場合の行動はもっと自由になり得るということから、<一郎の>も<右足を>もどちらも取り立てられた結果となった。しかし、このように<～が格>をとるのではない場合は、多くの例文テストの<NのN>は両方が取り立てられるのではなく、意味の限定力の相対的に強いいずれか一方が取り立てられ易かった。但し、2語がセットになって1つになっているような、図4の⑧の場合、<筑波大学の鈴木先生が>を両方とも同時に取り立てた人が40%いた。⑦の場合、<学生が>を取り立てた人は一人もなく、<筑波大学の>の方が選ばれている。

図4 (25人)



<固有名詞の一般名詞>ととるか、<全体の部分>ととるかは、どうしても文脈からくる判定によるわけで、統語論上の特徴を探りながらも、形からでは決定が難しいところである。ひとたび固有名詞と普通名詞の関係と見なされれば、固有名詞の方が、又、全体と部分の関係と見なされれば、部分の方が選ばれることは間違いないようである。

図3の場合には、⑤<テストの成績が>が⑥<数学のテストが>と変化する

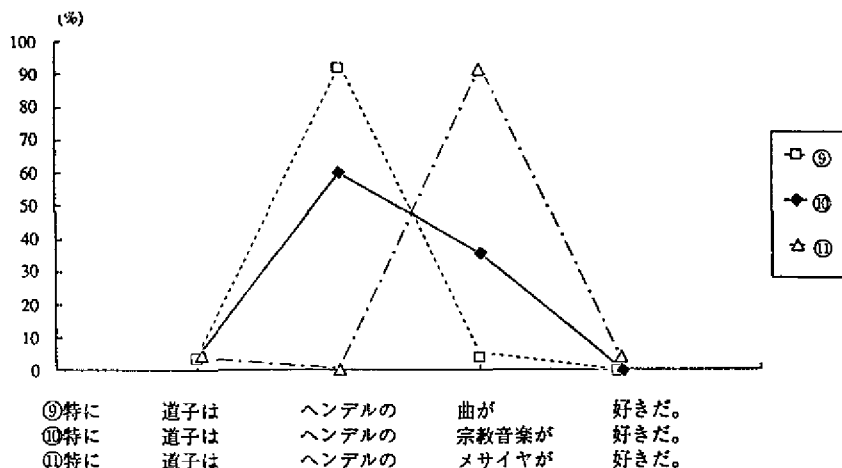
ことによって、取り立ての傾向がすっかり変わってしまっている。⑤では〈テストの成績が〉よりも、〈よし子は良かった〉に情報の焦点を置き、⑥では〈よし子は〉よりも〈数学の〉に焦点をおいた読みがなされている。より個別的、具体的なものが情報として重要であるとはいえ、その決定には社会常識まで持ち込んだ判定が最終的には必要と言わざるを得ない。

3.3.2. 仮説2 b: 意味の階層

仮説2 b 「語の意味の階層レベルが、より下位のものが取り立てられる。」を見ていこう。語はその意味によって、抽象的・一般的レベルから具体的・個別的レベルまで、階層をなして存在している。前者を上位、後者を下位とするならば、下位の語ほど焦点となりやすい。前節でも〈名詞の名詞〉について、相対的に意味の限定力が強い方が取り立てられることを論じたが、意味の階層によって、焦点の変化する例を更に見てみよう。

図5は、〈曲〉〈宗教音楽〉〈メサイヤ〉と順に意味の階層のレベルを下げてテストをした結果である。階層レベルに応じて取り立てられやすさの傾向が変化している。

図5 (25人)



また、数字も、意味の限定という点で、取り立ての焦点になりやすいようで、〈200円の弁当を〉といった場合には〈200円の〉の方にはっきりと取り立て傾向が見られた。

また、意味の階層とは異なるが、例えば〈ズボン〉と〈上着〉とか、〈右足〉と〈左足〉のようなベアーになる語が容易に想像されるものも、取り立てられやすい傾向を示した。

Bolinger (1972) は語の semantic value が情報の焦点と関係することを論じ、'Accented words are points of information focus' と述べた上で、semantically richer word に文のアクセントが置かれ、semantically empty word には文のアクセントは置かれずとしている。empty word としては代名詞や semi-pronoun としての people, things や動詞では do, go というようなものをあげている。これは、抽象度の高い意味階層の上位のものほど焦点にはなりにくく、下位のものほど具体的で、焦点になりやすいという拙稿の論と同じことである。ただし、Bolinger はこれを統語論や形態論のレベルで論じることを批判している。

格の階層についても、同じ現象があるかもしれないが、これは調べていない。必須補語か随意補語かといえば、随意補語のほうに焦点が集まるようで、道具格の〈～で〉は焦点が集まりやすかった。

3.4. 仮説3：副詞の位置

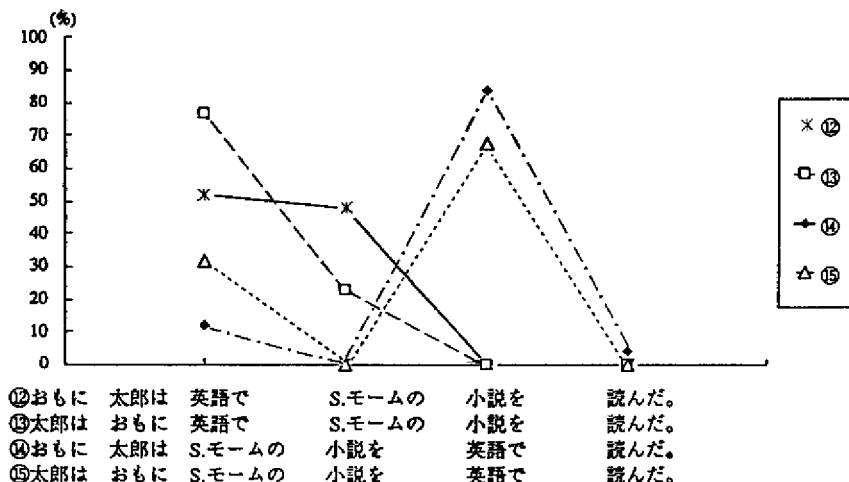
仮説3「序列副詞が文頭にはなく、文中に入った場合は、これの後に隣接する要素が取り立てられやすくなる。」について見ていく。

これまで示したテスト結果は、〈最初に〉〈特に〉〈おもに〉を主語の前に出して、文頭に固定し、これら以外の条件を変えた場合の文の焦点のあり様を調べたものであった。図6はこれらの副詞が文中に位置した場合、この副詞の後ろに隣接する語が取り立てられやすくなることを示すものである。ただし、これまでの観察では、仮説3は、図6に見られるように、情報の重要度と競合すると、負けてしまうようである。⑫～⑮の全てで、〈英語で〉が一番取り立てられているが、これは被験者の日本人学生にとっては情報の重要度が高いのであろう。また、これは道具格であることによるのかもしれない。そのために、仮説3に従えば、⑫の場合〈S. モームの〉になるところが、僅かではあるが、〈英語で〉に及ばなかった。⑭⑮ではこの〈英語で〉が動詞の直前（仮説4）にあるために、高い割合で取り立てられている。

仮説3について観察すると、〈おもに〉の直後にくる⑬の〈英語で〉及び、⑮の〈S. モームの〉がそれぞれ⑫⑭の場合よりも20%ほど高くなっている。このような傾向は他の例文でも確認されている。

〈英語で〉に焦点をおくためには、おそらく次のように言えば一番情報が正

図6 (⑬21人, ⑭⑮22人, ⑯25人)



確に伝わるだろう。

⑯ 太郎は、S. モームの小説をおもに英語で読んだ。

3.5. 仮説4：語順

仮説4「文頭に近い要素よりも文末の述語動詞の直前に隣接する要素のほうが取り立てられる。」について見てみよう。

図6の中で、〈おもに〉を文頭に固定した⑬と⑮を比較すると、⑮のほうが〈英語で〉の取り立てが高くなっている。また、⑬では動詞の直前の補語成分である〈S. モームの小説〉のうちの〈S. モーム〉がかなり注意を引き付け、その分、〈英語で〉の取り立ての割合が下がっていることも、仮説4で説明できる。更に図7、図8でも同じ現象が見られる。

図7において、〈弁当を〉の取り立ては、⑰では12%だったのが動詞の直前に移動した⑱では48%と上がっている。また、図8においては、⑳の〈大学で〉が23%なのに対して、動詞の直前に〈大学で〉がある㉑では43%と上がっている。また、⑲の〈油絵を〉は57%であったが、㉒の動詞の直前では73%となっている。

以上見てきたとおり、述語動詞の直前にある要素は、取り立てられ易くなる

と言えよう。

図7 (25人)

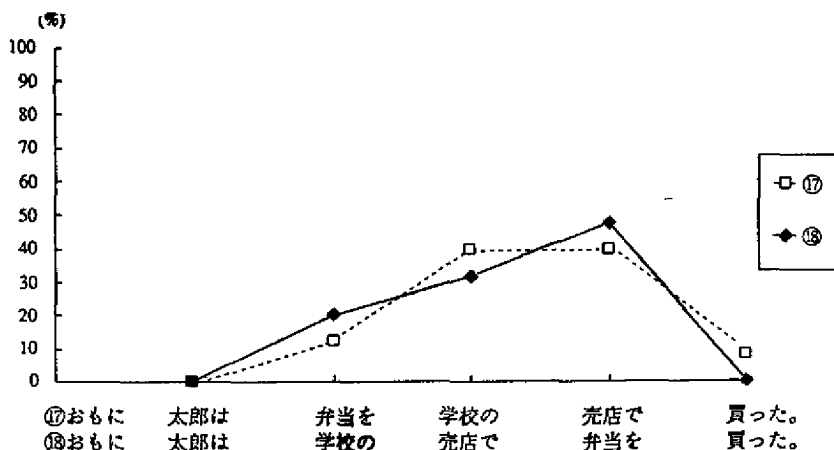
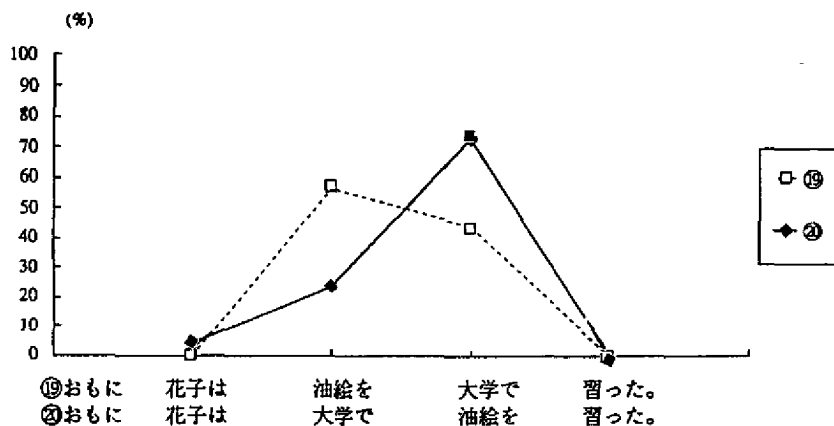


図8 (22人)



5. おわりに

取り立ての焦点は最終的には文脈により左右されるようだ。だからといって、本稿で探った焦点決定の仕組みの仮説が無意味になることはない。なぜなら、

文レベルで焦点のあり方の傾向が見られるということは、談話レベルにおいて情報の重要度が高く、焦点となるものは、文として発話される時に、受け手の注意を引き付けて焦点になり易いように、焦点の統語的な特徴に適合させて、発話しているのではないかと考えられるからである。

発話者は取り立てようとする情報が主部にあるのか、述部にあるのかをまず示し〈仮説1〉、なるべく詳しく具体的に述べ〈仮説2〉、述語動詞の直前に置き、印象を強めるようにし〈仮説4〉、序列副詞をそれに隣接させ〈仮説3〉、受け手に間違いなく発話意図を伝えようとするのではないだろうか。表現の経済性の観点から言えば、人は必要最小限の労力で述べようとするのであり、不必要なことを詳しく述べることはしない。わざわざ詳しく表現する（例えば〈名詞の名詞〉）のは、そこに表現意図があるためと言えよう。また、表現の有効性の観点から言えば、伝えたいことを相手に最も強く印象に残るように有効に伝達するために語順などの工夫をするのではないだろうか。

一方、受け手は談話レベルからの文脈理解に基づきながら、それに焦点の統語的な特徴を手がかりにして、発話の意図を正しく把握するものとする。この受け手が常識豊かな母語話者であれば文脈からだけで、取り立ての焦点を決定することも簡単であろうが、外国語話者やコンピュータが受け手の場合には文脈理解に問題があるわけで、そのような場合に、文レベルでの取り立ての焦点の仮説は手がかりになるかもしれない。これは質問文や否定の焦点にも関係があるはずである。

本稿では序列副詞によって取り立ての焦点を探ったが、これは小さい実験にしかすぎない。今後、更に多様な例文で実験し、実例を調べていくことで、ここに挙げた仮説を検証することが必要だと考える。

注

- (1) ここでいう取り立ての機能は以下の通りであることをことわっておく。

取り立て機能：文中のある要素に読み手や聞き手の注意を引き付け、その要素を暗黙のうちに比較の対象と了解されるカテゴリーの中で順序付けることにより、対比的に際立たせる機能である。「対比的に」ということは「取り立てられている」要素が「取り立てられない」ほかの要素を暗に示して対比しているということである（小林1987より）。

- (2) ここでいう「作用域」「焦点」については次に引用する沢田（1978）の定義に従うものである。：「scope」（「作用域」）というのはある要素が作用（影響）を及ぼしうる範囲の総体を指し、‘focus’（「焦点」）というのは scope の中で特に集中的、集点的にその作用（影響）を受ける言語要素のことである。」
- (3) 文脈によっては、〈最初に〉の後に続く主語を含む文全体が作用域ということも

ありうる。

- (4) このように広い範囲の取り立てまで焦点と呼ぶことには異論もあろうが、ここでいう焦点は、一番狭い場合が作用域内の一つの実質語、一番広い場合が作用域全体と考えている。
- (5) 「要素」は文を構成しているかたまりの部分というような、定義のゆるやかな意味で使っている。要素どうしを比較するときには同じ単位どうしで比較している。例えば、補語を比較しているときは、補語の単位で比較し、補語が<名詞1>の名詞2>と枝分れしていても、これ全体を一つの単位とする。実質語一つ一つを要素と見ているときは<名詞1><名詞2>がそれぞれ一つの要素とみなされる。

参考文献

- 井上 至 (1959) 「対比的限定と特立的限定」『大阪市大 人文研究』8-1
- 井上和子 (1975) 「構造と生成」『国語学』101
- 北原保雄 (1991) 「表現主体の主観と動作主の主観」『国語学』165
- 工藤 浩 (1977) 「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院
- (1982) 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』
- 久野 暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 小林典子 (1987) 「序列副詞—最初に、特に、おもにを中心に」『国語学』151
- 佐伯哲夫 (1960) 「現代文における語順の傾向—いわゆる補語の場合—」『言語生活』111
- 沢田治美 (1978) 「日英語文副詞類 (Sentence Adverbials) の対照言語学的研究」『言語研究』74
- 寺村秀夫 (1984) 「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語 (1991) 学』『シンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 野田尚史 (1984) 「副詞の語順」『日本語教育』52
- 林万紀子 (1983) 「質問文の焦点を探る」『東京女子大学 日本文学』60
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- Akmajian, Adrian : (1979) "Aspects of the Grammar of Focus in English", Garland Publishing Inc.
- Bolinger, Dwight : (1972) "Accent is predictable (If You're a mind-reader)", *Language*, 48-3
- Greenbaum, Sidney : (1969) "Studies in English Adverbial Usage" Longman
- 『英語副詞の用法』グリーンボーム著、郡司利夫、鈴木英一監訳、研究社 (1983)
- Taglicht, Joseph : (1984) "Message and Emphasis—On Focus and Scope in English", Longman